

## 辛亥革命期の湯国梨と務本女塾

——女性教員、女性運動家として——

杉本史子

はじめに

湯国梨<sup>①</sup>（一八八三—一九八〇）は、章炳麟の後半生を支えた賢夫人として知られる。章炳麟が袁世凱に幽閉されたときには、書簡で慰め、その後も政治的には挫折の連続であった章炳麟の生活を支え、学者としての活動を助けた。その経緯は高田淳『章炳麟・章士釗・魯迅—辛亥の死と生』<sup>②</sup>に詳しい。

しかし湯国梨自身がどういう人物であったかは、あまり知られていない。高田氏は「湯国梨夫人は奇矯なる夫章炳麟の貞淑なる妻であったばかりではない」と述べ、彼女の得意とした詩詞に触れている<sup>③</sup>。だが湯国梨には詩人としての才能があったばかりではない。さらに別の側面があった。それは女性教員、女性運動家としての姿である。

湯国梨のまとまった伝記としてまず挙げられるのは、章炳麟と湯国梨の孫にあたる章念馳<sup>④</sup>氏が記した「先祖母湯国梨夫人伝略」<sup>⑤</sup>（以下、「伝略」とする）である。この略伝は、様々な資料<sup>⑥</sup>と祖母から直接聞いた話をもとに、湯国梨の九六年間にわたる生涯を描き出したものである<sup>⑦</sup>。親族の手による文史資料ではあるが、親族だからこそ知り得た、彼女の具体的な姿をうかがうことができる。本稿はおもにこの「伝略」によりながら、湯国梨の生涯、特に章炳麟と結婚する前の彼女の活動を紹介していきたい。

「伝略」から見えてくるのは、彼女の生涯にもたらした女学校の影響の大きさである。浙江省の田舎町で育った湯国梨は、上海の務本女塾に進学したことにより、革命運動へと足を踏み出していく。革命とは本来無関係であったこの女学校は、湯国梨を多くの知識人女性と結びつけ、結果的に彼女をさまざまな社会的活動へと導いていった。卒業後も彼女は女性教員、女性運動家として活躍し続ける。こうした湯国梨の歩みは、女学校を出た知識人女性の社会における活動の一例を示すものと考えられる。湯国梨はどのようにして革命運動に加わるようになったのか。彼女の生涯に、上海での女学校生活をもたらしたものは何だったのか。そしてまた革命運動、女権運動において、女学校はいかなる役割を果たしたのか。辛亥革命期における湯国梨の活動を追いながら、その実態を考察したい。

### 一、少女期

一八八三年九月、湯国梨は上海の小さな路地裏の一角で生まれた。父の本籍は浙江省の烏鎮にあり、もともとは養蚕業を営む裕福な家系であった。だが太平天国の度重なる戦火によって、家財と生業とを失い、職を求めて上海に移り住んだ。男の子の誕生を待ち望んでいた父はひどく失望し、次こそは官僚となり得る男の子を連れてきてくれるようにと、

娘に「引官<sup>インクワン</sup>」と名付けた。後に彼女がペンネームで使った「影観<sup>インクワン</sup>」は、この幼名から取ったものだ。

父はその後も職を変え、一家は江南を転々とする。幼少時には、他の多くの女性と同様、纏足を施された。後々まで小さな足に苦しめられることになるが、彼女はさっそうと歩き、健脚だったといわれている。伝統観念の支配する境遇で育った湯国梨だが、わずかではあるが教育を受ける機会に恵まれた。父は家で字を習わせ、唐詩を教えた。学校には行かず、私塾で二年間学んだだけだったが、後に独学で勉強できるだけの基礎を身に付けた。幼い頃より聡明で、容貌に恵まれていた彼女は、皆に可愛がられたという。

九歳のとき、苦勞を重ねてきた父が亡くなった。一家は両親の故郷である烏鎮に戻り、母方の伯父の家に身を寄せた。湯国梨は三人姉妹の長女として家の仕事を率先して引き受けた。炊事、裁縫、洗濯など、何でもこなした。日中は家事労働に従事し、夜になると一人で勉強した。わずか一セツトの辞書に頼って、詩や詞を詠むことを独学で身に付けたという。作詩のための音韻や填詞の平仄なども、書物から学んだ。自分の置かれた境遇を哀しみ、古の詩を読んで涙することも多かった。

年ごろになると、美しく成長した湯国梨のもとに、続々と縁談が持ち込まれた。フランス留学帰りの裕福な家の青年や、『神州日報』の編集者などから話があったようだ<sup>⑧</sup>。だが彼女はことごとく跳ね除けた。時は清朝末期で、烏鎮のような田舎町にも、革命の機運が漂っていた。一九〇三年の「蘇報事件」で一躍有名になった章炳麟の思想は、すでに浙江全域に広まっていた。時代の変化を感じ取った湯国梨は、上海に出て勉強したいと申し出る。まもなく二三歳になろうというときであった。

一〇代半ばでの結婚が珍しくない当時、いまだ独身であること自体が、田舎では奇異の眼で見られたに相違ない。一人で都会に出て勉強をする

という彼女の発言は、人を驚かせるには十分であった。当時、女子の就学率は一パーセントにも満たず、ごく一部の恵まれた環境の女性しか、進学できなかった。さらに女学校に入るには、単に経済的な問題だけではなく、家のものが開明的な思想の持ち主でなければならなかった。幸いなことに、湯国梨は伯父が理解を示し、学費の支援をしてくれることになった。その点、苦勞の多い少女期を過ごしたとは言え、上海の学校に進学することができた彼女は、幸運であったといえるべきであろう。この女学校で得た知識、そして女学校の仲間たちこそが、湯国梨のその後の人生を大きく変えていくことになるのだから。

## 二、務本女塾での出会い

一九〇六年<sup>⑨</sup>の秋、湯国梨は上海へ赴き、務本女塾<sup>⑩</sup>に入学した。務本女塾は上海の篤志家、呉懷疚<sup>⑪</sup>の手によって始められた。もともとは家塾であったが、一九〇二年に校名を務本女塾と定め、女子の近代教育機関としてのスタートを切った。経元善の中国女学堂、蔡元培の愛国女学校とともに、もともとも早い時期に創立された中国人経営の女学校として知られる。務本女塾は「温、誠、勤、朴」を校訓として掲げ、良妻賢母を育てることを目的としていた。キリスト教系の学校に対抗し、日本の学校をモデルとした教育がおこなわれ、下田歌子の愛弟子、河原操子が一時、教鞭を執ったこともある<sup>⑫</sup>。上海では保守的な校風として通っており、華美な服装や化粧は禁止され、纏足しているものは、解くことを勧められた<sup>⑬</sup>。創立当初はたった七人の学生しかいなかったが、徐々に規模を拡大し、湯国梨が入学した年には学生一七五人を擁する、かなりの規模の学校となっていた<sup>⑭</sup>。

務本女塾は何より、数多くの人材を輩出したことで知られる。彼女と

同じ時期に学んだものの中にも、後世に名を残した人物が少なくない。教育家として活躍した呉若安<sup>⑤</sup>、女性初の国立大学校長となり、「北京女子師範大学事件」を引き起こすきっかけとなった楊蔭榆<sup>⑦</sup>、張通典の娘であり、革命家として知られる張黙君<sup>⑧</sup>、女権運動で湯国梨と歩みをともし、『神州女報』の編集者を務めた楊季威。いずれも同じ年代に学んだ学友たちである。この女学校時代の仲間が、湯国梨の長年に渉る貴重な宝となる。

錚々たるメンバーの中で、湯国梨は優秀な成績を修めた。学校では飢えたように勉強したと書かれている。経済的にはもともと貧しかったが、志が高く、成績も優秀であった湯国梨は、学友たちの尊敬を集めた。作家の楊絳は、聴講生であった母が叔母の楊蔭榆と、当時の学友のことを話題にしているのを耳にしたことがあり、そのうちの一人が章太炎夫人となった湯国梨であったと記している<sup>⑨</sup>。また呉若安は「上海務本女塾の思い出」の中で、こう語っている。

師範科を卒業した湯国梨は、すこぶる文才があり、詩や詞を得意とした。後に著名な国学大師、章炳麟先生と結婚した<sup>⑩</sup>。

湯国梨は学友たちの中でも、ひとときわ目立つ存在であり、務本女塾の「皇后」ともいわさされていたようだ<sup>⑪</sup>。

湯国梨は纏足をした小さな足であったが、体育の授業にも強い意志で参加した。女性の健康美がもてはやされるようになるのは、もう少し後の時代である。女性が飛んだり跳ねたりするのははしたないことという風潮のもと、外からは見えない場所で隠れるようにして、体育の授業をおこなっていた女学校もあったほどだ<sup>⑫</sup>。裕福な家庭のお嬢様方が通学者の多くを占める中で、家事労働に慣れていた湯国梨からすれば、体を動かすことはさほど苦痛ではなかったかも知れない。

校風は厳しかったが、上海という自由に溢れた街で、湯国梨は学友た

ちと国事を語り合った。中国は列強の侵略にさらされているという危機意識が高まるなか、みな強烈な愛国心を抱いていたという。呉若安の回想では、英語の授業で、南京条約でイギリスに割譲された「香港、九龍を取り戻す」という話劇を演じたこともあるようだ<sup>⑬</sup>。現在とは異なり、学生は知識人を代表する一群だった。女子学生の中にも国事を憂い、それを行動に移すものが少なくなかった。親元から通う学生には一定の制限があったが、湯国梨は郷里から離れ、比較的自由に行動できる環境にあった。

ちょうどその頃、清朝政府が列強に売り渡した鉄道利権を取り戻そうという、利権回収運動が高まりを見せていた。一九〇五年から数年にわたって続いた、いわゆる保路運動である。湯国梨も学生の身ながらこの運動に参加した。上海では、杭州で成立した保路会を支援するために、光復会の会員が浙江旅滬学会（滬は上海を指す）を作り、運動を展開していた。この運動を率いたのが、後に夫となる章炳麟であった。

女性たちもこの呼びかけに応じた。一九〇七年一月には、民立上海女中学堂<sup>⑭</sup>で第一回女界保路会が開かれた。演説したものは激しい口調で、一言話すたびに涙を流したという。メンバーの多くは女子学生であった。上海市から一校、他の都市から三校が参加し、各女学校の代表もそれぞれ演説をした。図らずも女学校が運動の拠点となることが見て取れる。ここに湯国梨の名前は見当たらないが、「務本女塾の学生四人」とあるうちの一人が、湯国梨ではないかと思われる。一二月には、懇親会が開かれた。途中で多くの女性が演説し、最後に湯国梨が発言したと記されている。

次に湯国梨女史が浙江旅滬同郷会を設立することを提案し、賛成するものは、挙手して同意を表してほしいと述べた（このとき、多数の人が挙手して賛成した）。湯女史はまた述べた。今日は懇親会です。

同郷会については、また後日、日を選んで正式に大会を開きましよう云々。<sup>27)</sup>

すでに中心人物の一人となっていた湯国梨は、連日務本女塾の学生を率い、愚園、錫金公所など、人の集るところで演説をした。鉄道を守り、借款に反対しようという彼女の演説は、聴衆の心を動かし、寄付に応じる女性も多かったという。彼女にとって保路運動は、初めて参加した政治運動であった。そしてここで出会った女性の仲間たちが、辛亥革命の支援団体を組織するときの基盤となった。

一九〇八年の夏、湯国梨は師範科トップの成績で務本女塾を卒業した。前年の卒業式には、来賓が五百名余りも訪れたという記録がある。上海有数の女学校であった務本女塾の動向は、社会的にも大きな関心が寄せられていた。

卒業後、彼女は郷里に帰り、私立呉興女学校の求めに応じて教員となった。呉興女学校は、地元教育家である沈譜琴が、女子の師範教育を進める目的で、自宅の敷地に創設したばかりの学校だった。当時の知識人女性にとって、教職に就くことは、社会に出て働くほほ唯一の道だった。務本女塾の卒業生の多くも、教員となって各地へ散っていった。呉若安の回想によると、卒業生の「多くは教職に就き、その他には公務員、薬剤師、会計士になったものもいる。家で主婦となったものもかなりいた」という。知識人の間に「教育救国」という言葉が広まったのはもう少し後の時代であるが、学校教育を受けた数少ない女性の一人として、湯国梨も同様の気持ちを抱いていたに違いない。また、彼女はここで生まれて初めて経済的な自立を果たしたことも、見逃してはならないだろう。

呉興女学校で教職にたずさわった湯国梨は、初めは教員、次には寮の監督である舎監を務め、最後には校長となった。二〇代半ばで校長に就任したことになるが、女学校、しかも師範科を卒業したエリートである

ならば、当時としてはさほど珍しいことでもなかった。

一九一一年の秋、湯国梨は務本女塾の友人から、自分たちで学校を創ろうと誘われ、上海に戻った。三年間郷里で教員生活を送ったものの、田舎町は独身女性にとっては住みづらい環境であったのかも知れない。その彼女の目前に近づいていたのは、辛亥革命であった。

### 三、辛亥革命における女性たちの活躍

一九一一年一月一日、武昌蜂起が勃発する。湖北独立の知らせに続き、各省は次々と清朝からの独立を宣言した。務本女塾の卒業生たちも、はやる気を抑えながら、自分たちにできることはないかと模索した。辛亥革命における女性たちの活躍は、よく知られている。清朝末期に武装蜂起を企て、処刑された秋瑾は、もともと有名な女性革命家である。他にも、多くの女性たちが暗殺、密使、荷物の運搬役などを買って出た。女性に清朝の弾圧が及ぶことは少なかったが、それでもやはり革命運動に加わることは、命がけの行動であった。革命が起こると、自ら銃を手を持ち、従軍する女性も現われた。実際には、体力的に劣る女性兵士が、どこまで実戦の役に立ったかは疑わしい。しかし各地で結成された女性兵士団（女子軍）の存在は、彼女たちの心意気を示すには、十分すぎるほどであった。

女子軍の中には、務本女塾の卒業生で湯国梨の友人である張黙君も加わっていた。辛亥革命が起こると、上海には女子軍だけでなく、数多くの女性による革命支援団体が結成された。そのうちの女子後援会と女界協賛会<sup>28)</sup>は、主に資金収集を担った。女子後援会は、同盟会の会員であった唐羣英<sup>29)</sup>、張黙君、張漢英<sup>30)</sup>らが、上海近郊の女性教員らとともに創った団体である。彼女たちは資金集めをおこなうとともに、北伐軍に従って

救護活動に当たった。張黙君は、女界協賛会でも幹事長を務めている。「伝略」によると、湯国梨はこの張黙君と談社英<sup>⑤</sup>に誘われて、女子北伐隊を作る資金集めに奔走した。だが上述した二つの会の会の発起人に、湯国梨の名は見当たらない。女界協賛会の事務所は務本女塾に置かれたとあることから、湯国梨はこの活動に加わっていたのかも知れない。

当時、中上流階層の女性が、資金を集めるときは、自らの装飾品を売ったり、バザーで寄付金を募ったりする方法がよく取られた。湯国梨が生前に語った回想には、寄付金を集める方法が、かなり具体的に記されている。

私は安凱第<sup>⑥</sup>で園遊会を開催し、資金調達をはかるといふ意見を出しました。務本女塾の卒業生やその親戚、友人に参加してもらい、高値で入場券を売りさばきます。同時にたくさん的高級飲料、シガレット、シガー、ビスケット、キャンデー、果物、生花、そして女性用の化粧品、さらに私たちがその場で作る「サンドイッチ」などを、会場で定価をつけずにチャリティーで売ります。接待係は務本の卒業生が請け負います。こうした私の主張は皆に受け入れられ、準備期間を経て、いよいよ園遊会の開幕となりました。

極めてモダンな方法である。日本語では片仮名で表されるような西洋の品々が、次々と出てくるのには驚かされる。近代に入ってから女性の活躍は、都市の繁栄と機を一にしていた。因習に縛られず、自立した女性たちにとって、都市は生活に便利であっただけでなく、社会的な活動を積極的に展開できる場所でもあった。湯国梨たちの革命支援活動は、上海という都市が舞台となつて、大きく花開いたとも言える。では、園遊会の結果はどうであったのか。

園遊会は三日間開かれました。毎日午後四時頃になると、お客様がだんだんとやってきます。私も接待係を請け負いました。華やかに

着飾つて会場に赴き、接待しました。私たちはみなチャリティーに出す様々な品物を入れた盆を手に掲げ、お客様に選んでもらいました。いわゆる「定価をつけずにチャリティーで売る」ということで、お客様が自ら市場価格の二倍から二〇倍、ときには百倍以上の値段をつけて、一品もしくは何品かの品物を選んで買われます。当時すでに、各界の人々は、革命を熱烈に支援しようという傾向にありましたので、チャリティーでは喜んで寄付してくれました。

もちろん、すべてが順調に進んだわけではなく、ばつが悪いできごともあった。途中、見るからに裕福そうな恰幅のいい男性がやってきて、湯国梨を招き寄せると、シガーを選んだ。そしてタバコをくわえて、彼女にマッチで火をつけるよう命じた。うまくつかないのを見ると、男は人前でこののしつたという。「二〇いくつにもなるうものが、マッチも擦れないとは。賢いふりをして中身はお馬鹿さんだな。」こんな耐えがたい思いをしたことはなかったと、湯国梨は述べている。寄付にかこつけて、若い女性をからかってやろうという雰囲気もあったのかも知れない。

だが屈辱的な経験を乗り越えて、園遊会を終えてみると、合計五万元の現金が集っていた。成功裏に終わったといつてよい。彼女たちの運動が、どこまで広く社会の理解を得られたかはわからない。ただ、革命を支援するという風潮が広まっていた上海で、務本女塾同窓会の人脈力が、最大限に活かされたことは確かだ。もともと愛国女学校などとは異なり、務本女塾は保守的な校風で知られ、決して革命思想を宣伝する目的で創られた学校ではない。だが結果的に、そこで教育を受けた女性たちは、近代的な知識を身につけ、自立して生きる経済力を確保し、新しい思想に向かつて行動を開始していった。辛亥革命で活躍した女性はあまたいるが、上述した二団体の活動を担ったのは、おもに上海もしくは近郊の

学校で、教職に就いていた女性たちであった。彼女たちが活動の拠りどころとしたのは、自分をはぐくんだ女学校とその仲間たちだった。女界協賛会の事務所が、務本女塾に置かれたというのも、知識人女性たちが、女学校を基盤としてつながっていたことを物語っている。期せずして、女学校は革命運動の根拠地の役割を果たしたのである。

しかし彼女たちが集めた資金が、革命に活かされることはなかった。すでに南京は攻略され、女子北伐隊が進撃する必要はなくなっていた。張黙君は資金の使い道について、孫文にうかがいを立てている。孫文の返事はこうだった。

あなた方は若くて将来の見込みがある女性の同志たちですから、宣伝活動や教育の仕事をする事ができますでしょう。園遊会で集めた五万元は、学校や新聞社を創る経費になさい。

こうして集められた資金は、後述するように、女学校の運営費、雑誌の出版費用などに当てられることになる。

#### 四、神州女界協済社での活動

一九一二年の中華民国の誕生により、辛亥革命で活躍した女性たちは、自分たちにも参政権が与えられると期待した。辛亥革命までは女権運動と革命運動が一体となり、女性たちは、清朝を倒せば女性も権利を獲得することができると思っていた。女性参政権については、呉芝瑛、陳擷芬<sup>48</sup>ら、革命で指導的役割を果たしてきた女性たちが中心となって、議会への請願をおこなった。だが、その期待は裏切られた。女性参政権を求める唐羣英らが参議院に乗り込み、窓を割って抗議したエピソードは有名である<sup>49</sup>。しかし結局、彼女たちの願いはかなわなかった。女性参政権獲得運動はその後、保守的な圧力も加わって、急速に衰えを見せる。

だが女性たちは政治の場に加わりうとただだけではなく、女性全体の地位向上のために地道な活動も展開した。一九一二年三月には、女性たちの力を総結集したかのような神州女界共和協済社<sup>50</sup>が上海で成立した。成立後は、共和の二字を取って神州女界協済社と称した。孫文の夫人であった盧慕貞が名誉社長に選ばれ、これまで活動を共にしてきた友人の張黙君が正社長となった。総勢一二〇名余りを擁するこの組織で、湯国梨は唐羣英とともに編集部長を務めることになった。

神州女界協済社は、基本的に臨時政府に忠実な女性の一群であった。おもな活動は、雑誌を発行して女性たちを啓蒙することと、女性への教育を支援することであった。雑誌は社の名前を取って、『神州女報』と名付けられた。湯国梨は、唐羣英とともに『神州女報』の初代編集部長となった。一九一二年一月に第一期が出版され、一〇日ごとに、第八期まで出された。翌年三月には人事異動があり、編集部長は務本女塾の学友、楊季威へと代わり、副編集部長は談社英となった。発行のペースも月刊に変わり、第四号まで出された。内容は、社説、時評、国内外の記事、有名人の伝記、小説、文芸欄、海外記事の翻訳など、バラエティに富んでいる。臨時政府の庇護の下で作られたこともあり、辛亥革命の志士を称揚する記事が多い。秋瑾を顕彰したことも知られている。

一九一三年、宋教仁が暗殺されたときには追悼特集を組み、事件の経緯を述べた記事には、「民国の不幸、国民の不幸」という表題を掲げた。張黙君は「宋鈍初先生を哭す文」という追悼文を書き、談社英も「宋漁父先生を哭す」という哀悼の詩を寄せた。神州女界協済社の社員全員の名で、「宋鈍初先生を祭る文」を書き、「神州女界協済社が宋教仁を追悼する歌」を作詞作曲した。楽譜まで載せられている。宋教仁は、女性の参政権は時期尚早だと主張していたが、女性たちは革命の功労者として高く評価し、深い哀悼の意を表している。同時に『神州女報』は、影の

首謀者と思しき袁世凱を非難する論陣を張った。

『神州女報』には、五四新文化運動期の女性雑誌のようなラディカルな女性解放論は見られない。だが既存の範囲の中で女性の権益を守っていかうとする、穏やかだがはつきりとした主張が感じられる。例えば当時、陳絢雲という社員の夫が、西洋人の妻を娶って陳を捨てるといふ事件が発生した。従来の伝統規範からすれば、この西洋人女性を妾の一人として迎えれば収まる話で、正妻がさしたる理由もなく、捨てられるケースは稀であった。だが民国期には伝統的な家族制度が崩壊し、従来の価値観が少しずつ覆されていった。これにともなう、正妻の地位も低下し、女性への性抑圧が露骨になったと言われている。神州女界協済社では、陳絢雲を守る集会が開かれ、弁護士を雇ってまで応援し、その経緯は『神州女報』に逐一報告された。結果的に、陳は夫から財産の四分の一を譲り受けることに成功している。この陳絢雲は高官の元妻であり、決して底辺の女性とは言えない。言わば提訴できるだけの力を持った女性であった。だが『神州女報』の紙面からは、不利な立場の女性を社全体で応援しようという、熱い空気が感じられる。

このころ、湯国梨はすでに章炳麟との結婚話が持ち上がったためか、月刊誌となつてから、彼女自身の記名記事は見当たらない。ただ文芸欄には、しばしば影観という筆名で作品を発表している。

第一期に載せられた「呉興を別れる」<sup>53</sup>は、故郷で教員として過ごした三年間を懐かしんだ詩であろう。また「亡き友愈慶和君を懐かしむ」<sup>54</sup>は、早世した務本女塾の友人を悼んで贈ったものである。第二期にも故郷の妹に寄せた詞<sup>55</sup>が載せられている。第三期に載せられた「客たりて感あり」<sup>56</sup>は、自分の境遇を顧みながら、当時の心境を詠ったものであるか。同じく第三期に掲載された「時事感言」<sup>57</sup>からは、はつきりとした世相批判が見て取れる。

列国競雄長。天涯逐鹿忙。列国雄長を競い、天涯逐鹿に忙し。

登場多傀儡。当道有豺狼。場に登るは多く傀儡、道に当たるに

豺狼あり。

未建中興業。先教半壁亡。未だ中興の業を建てざるに、まず半

壁をして亡わしむ。

民膏悉吸取。釀酒供誰嘗。民膏悉く吸取し、酒を醸して誰に供

して嘗さしむ。

(列国が力を競い、天の果ては主導権争いで忙しい。政治の舞台に出るのは、ほとんどが傀儡で、政権を担っているものは残忍な悪人だ。未だ中興の業が建てられないまま、国土の半分が失われてしまった。人民の血と汗の結晶はほしいままに吸い取られ、酒を醸しても誰に供して味わわせるのか。)

中華民國は成立したものの、袁世凱に政権を取られてしまったという失望感、湯国梨のみならず、革命にたざざわった多くのものが共有した感情であろう。冒頭で述べたように、湯国梨は後年、詩人として高い評価を受けた。だが、本稿ではこの一首を紹介するに留めたい。

『神州女報』を発行して女性への啓蒙活動を続けた神州女界協済社は、もう一方で女子教育の普及にも力を入れた。社で創設した学校は、神州女学と名付けられた。神州女学の校長には張黙君が就任し、湯国梨も教員として活躍した。神州女学は穏健派の女性雑誌『中華婦女界』にこう紹介されている。

北四川路「現在の四川北路」の神州女学は、開校以来すこぶる成績がよい。校規はもとより、極めてすぐれている。そして道徳をもっとも重んじている。思うに、運営に当たっている女史たちがみな、熱心に事にあたり、経営に心をくだいてきたことが、今日の成果を招いたのである。(中略)「卒業式典の出し物である」演劇はよく練習されていた。中でも幼い児童の「愛国会」と「亡国の鑑」の二

幕は、すばらしかった。幼い児童の「愛国会」は、初等小学校の児童全員で演じたものである。演説は明確で、顔には憤激の感情を表し、すこぶる観衆の愛国の念をゆさぶった。そのため拍手が一時雷のように鳴り響いた。<sup>66</sup>

神州女学の教育は、当時から高く評価されていたようだ。演劇の題目からは、愛国教育が徹底されていたこともうかがえる。また翌年の『中華婦女界』にも、神州女学は創立四年の現在も、入学希望者が跡を絶たないとい報告されている。<sup>67</sup>

一九二〇年代に入ると神州女学では、魯迅の弟、周建人が教鞭を執り、また著名な教育家、陶行知を迎え、「中国女子教育の過去と将来」というテーマで講演会が開かれたこともあった。<sup>68</sup>だが残念ながら、一九二六年、北伐が迫る混乱した状況の中で、神州女学は閉校となってしまう。<sup>69</sup>

神州女界協済社の活動は、神州女学の運営に留まるものではなかった。一九一二年、務本女塾が経済的に立ち行かなくなるといふ事態が発生する。このことを知った神州女界協済社は、ただちに孫文や教育部長、衛戍総督などに援助の申請を打診している。<sup>70</sup>務本女塾の卒業生たちが、母校消滅の危機に驚いたためであろう。社の熱意に押され、孫文は一万元の援助を出すことを約束し、衛戍総督であった徐紹楨からは毎月三百元の補助と、四、五千元の開設費を取り付けることができた。このため務本女塾は上海県立第一女子中学となって、存続することが可能となった。同校は卒業生とその仲間たちの力によって、救われたと言ってよいだろう。<sup>71</sup>

## 五、章炳麟との結婚、その後

神州女界協済社の活動が軌道に乗ったころ、湯国梨は章炳麟との結婚

話が進んでいた。この話を持ちかけたのも、務本女塾の友人だった。

章炳麟は先妻、王氏と一九〇三年に死別した後、独身生活を送っていた。その一方で「湖北籍の女子であること」「文の筋道がきちんとしていていいこと」「大家のお嬢様であること」「学校で自由平等を主張するよいうな悪習にそまっておらず、夫に従う美德をそなえた女性であること」という条件を出して、配偶者を探していた。章炳麟は辛亥革命の勃発直後に、呉淑卿という女性を見初めていたようだ。湖北籍の呉淑卿は才女でありながら、女子軍に志願するという勇敢な女性であった。<sup>72</sup>だが媒酌を求めた黎元洪から、別の媒酌人がふさわしいと逃げられてしまい、結局一緒になることはかなわなかった。<sup>73</sup>

そんな折、まもなく三〇歳になろうとしていた湯国梨に話が持ちかけられた。<sup>74</sup>媒酌人となったのは、務本女塾の友人である張黙君の父で、孫文の秘書長を務めていた張通典である。対する章炳麟は、四六歳。革命の立役者であったとはいえ、その生活ぶりは高位高官とはほど遠いものだった。だが湯国梨は、まず会って話しをしてみる必要があるかと、張黙君が尋ねてくれたにも関わらず、ただちにこの話を受け入れた。

彼「章炳麟」は革命のために、清の統治時代から弁髪を切って絶交の意を示しました。後には革命のために牢屋に入り、『民報』を創って革命を宣伝しました。その気骨ある精神と深くて広い学問は、平凡なものにはとても追いつけないものです。私は結婚したら学問の上でいつでも教えを請うことができると思い、ただちに結婚に同意しました。<sup>75</sup>

一九一三年六月、二人の結婚式は上海の哈同花園（ハルドーン・パーク）<sup>76</sup>で開かれた。孫文、黄興、陳其美、蔡元培など、錚々たる顔ぶれが集ったほか、多くの務本女塾の卒業生が駆けつけ、花を添えた。披露宴では新婦の友人たちの求めに応じて、章炳麟が即興で詩を作り、湯国梨が旧



作の詩を唱和して、時の話題となった。<sup>⑦</sup>

だが結婚後は苦勞の連続だった。二人の住まいははなはだ粗末だったという。白木のテーブル一台と長方形の腰掛が四脚あるだけで、その他の家具や調度品は他所からの借り物だった。<sup>⑧</sup> 式を挙げてから一ヶ月も経たないうちに、第二革命が勃発する。第二革命が失敗すると、多くのものが日本へと亡命したが、章炳麟は湯国梨の反対を押し切って北京へ赴き、袁世凱に直接面会を求めるといふ挙に出る。結局、そのまま捕らえられ、三年もの長きにわたって幽閉されることになった。幽閉期間中に袁世凱は、湯国梨を何度も北京に呼び出そうとしたが、彼女は動かなかった。手紙のやり取りは許されており、湯国梨の元には章炳麟から八四通もの書簡が届いた。湯国梨はこれを大切に保管し、辛亥革命五〇周年を迎えた翌年に、『章太炎先生家書』として出版した。<sup>⑨</sup> 幽閉期間中には、章炳麟が先妻王氏との間にもうけた三人の娘のうち、長女が自殺するという痛ましい事件も起こっている。長女は父の幽閉で精神のバランスを崩していたという。すでに成人し、他家に嫁いでいた長女ではあったが、湯国梨も義理の母として心を痛めたに違いない。

章炳麟は袁世凱の死によってようやく解放されたが、平穏な日々は長く続かなかつた。一九一七年、護法運動に心血を注いでいた章炳麟は、湯国梨に何も告げずに出発し、今度は一年三ヶ月も戻ってこなかつた。湯国梨は新聞で初めて、夫が孫文とともに広州に向かったことを知ったという。<sup>⑩</sup> 長男の章導が生まれてまだ三ヶ月も経っていないときのことだった。その心痛は思うに余りある。後に湯国梨は、子供たちにこう語った。「お父さんは革命に一所懸命で、「頭の中に」国はあっても家はなかつたと言っているわ。」<sup>⑪</sup>

このころ世間では、五四新文化運動の波が押し寄せてきており、女性解放運動も大きな盛り上がりを見せていた。しかしながら、湯国梨はこ

の流れには加わっていない。一つには、家の責任が湯国梨の肩のしかかり、運動に参加する余裕がなかつたためである。また夫妻はどうしても同一視される傾向がある。章炳麟は護法運動で深い挫折を味わっており、世間をにぎわせていた新文化運動には批判的態度を取っていた。こうした夫の影響もあつてか、湯国梨はラディカルな方向へと突き進んでいった女性解放運動とは、距離を置くようにしていたのかも知れない。

運動には加わらなかつたものの、湯国梨は教育には一貫してたずさわり続けた。上述した神州女学の教員を続けたほか、陳其美の家に赴いて家庭教師として働いたこともあつた。<sup>⑫</sup> これが余裕のなかつた章家の家計を支えたことは言うまでもない。また自宅近くの博文女学校で、学校運営を手伝った。<sup>⑬</sup> 博文女学校の創設者である黄紹蘭は、章炳麟の高弟、黄侃の妻（妾の一人）であり、さらに章炳麟の唯一の女弟子であつた。湯国梨は、女権運動の同志でもある黄紹蘭から、師として慕われていた。<sup>⑭</sup> 黄紹蘭の夫、黄侃は飛び抜けた才能を持った学者であり、章炳麟の一番弟子とも目されたが、女性関係にだらしなかつたことから、湯国梨は快く思っていなかつたようだ。<sup>⑮</sup> 同情する気持ちも手伝つてか、湯国梨は黄紹蘭のことを気にかけて、よく面倒を見たという。

『中華婦女界』には、この博文女学校の広告が見られる。中学を増設するため、学生三〇名を募集するという案内である。<sup>⑯</sup> 博文女学校は一九二一年、中国共産党の第一回代表大会が開かれた際、党員たちの宿舎として使われたことで、後世に名を残した。

生活が落ち着くと、湯国梨はふたたび女権運動へと戻ってきた。折しも女性参政権獲得運動がふたたび盛り上がりを見せ始めた時期であつた。運動が再燃したきっかけは、一九二二年に黎元洪が国会を回復する命令を下し、議会を開き、憲法を制定すると宣言したことだった。湯国梨は上海女権運動同盟会の成立に加わり、江蘇省支部の理事部部长に推

されて就任した<sup>85</sup>。江蘇省教育会で成立大会が開かれた際、湯国梨は「国家、社会、家庭の三つの方面で、女性は男性と同等にかかわっていく必要がある」と演説した。章炳麟もこのとき続けて、張継、陳望道らとともに演説したという。陳望道には、女性解放についての論述がいくつもある。しかしおよそ女権運動とは縁がなさそうな章炳麟が演台に立ったのは、妻の熱意に動かされたためであろうか<sup>86</sup>。上海事変が勃発した際にも、章炳麟は湯国梨が女性たちと兵士支援の活動をするのをバックアップした<sup>87</sup>。

二人は長らく上海を拠点に活動してきたが、一九三四年には蘇州に移り住み、翌年、章氏国学講習会を開いた。湯国梨は教務長を務め、学生たちの世話に追われたが、自ら教壇に立つこともあった<sup>88</sup>。学生たちからは、師母（先生の奥様）として慕われ、ここから数多くの弟子が巣立った。夫の学問を理解し、事業を手伝う賢夫人という形を取りながらも、やはり教員として活躍している彼女の姿を、ここに見て取ることができる。章炳麟が亡くなったのは、蘇州に居を移した二年後のことであった。湯国梨は夫の死後も章氏国学講習会を守り続けたが、日本軍の侵略により、閉鎖に追い込まれた。

人民共和国が成立すると、国民党から台湾への航空券まで用意されたが、湯国梨は断り、長男の章導とともに大陸に残った。だが章炳麟に対する評価は、激しく浮き沈みした。彼女への風当たりも、章炳麟への評価で変わっていった。そんな湯国梨の夫亡き後の悲願は、杭州の西湖のほとりに章炳麟の墓を建てることと、『章太炎全集』を出版することであった。

湯国梨は、共産党に対しては常に忠実な態度を示し続けた。彼女自身も江蘇省と蘇州市の人民代表に選ばれており、亡くなるまで江蘇省の文史館員と蘇州市の婦連執行委員の任に就いていた。また中国国民党革命

委員会蘇州市主任委員、蘇州市政協委員なども歴任している。

一九六四年、八〇歳を過ぎていた湯国梨のもとに、江蘇師範学院（現蘇州大学）から唐詩の鑑賞法について講演してほしいという依頼がきた。彼女は喜んで講演を引き受けた。教室は満員で、教室の外にも立って聴講する人が溢れたほどであった。湯国梨は手元の原稿も見ずに、とうとうと自分の見解を述べた。生き生きとして、理路整然とした語り口は、聴衆をひきつけ、続けざまに拍手がわき起こったという。草創期の女性教員として、面目躍如たるものがある。しかしこれが思わぬ結果を呼ぶ。文化大革命が始まると、青年に毒を流したとして、「造反派」に攻撃の口実を与えてしまったのだ。

文革では多くの知識人が攻撃の対象となった。すでに八〇代半ばとなっていた彼女も例外ではなかった。章炳麟に関わる多くの書籍や原稿も燃やされた。しかし湯国梨は落ち着いており、こんなことは長く続かないと言って、かえって孫たちを慰めるありさまだった。一九七〇年に周恩来が章炳麟の遺族への保護命令を出したことにより、ようやく一家に平穏な日々が戻った。

懸案だった二つの事項もかなえられた。一九五五年、章炳麟の棺は西湖のほとりにある、明の遺臣で民族の英雄として称えられる張蒼水の墓の横に収められた。『章太炎全集』も、一九七九年になってようやく上海人民出版社から出版される運びとなった。湯国梨は四〇年余りにわたって、章炳麟の遺稿、遺品、蔵書を保存し、整理することに心血を注いできた。文革が終わってからは、この仕事は孫の章念馳氏に引き継がれた。二つの願いを果たし終えた湯国梨は、趣味の作詩や裁縫を楽しみながら、穏やかに晩年を過ごしたという。

一九八〇年七月、湯国梨は九六年間の長い生涯を閉じた。江蘇省と蘇州市の政府関係者が追悼式典を開き、追悼文を贈って彼女の生前の活動

を称えた。彼女は今、念願かなって西湖のほとりに建てられた章炳麟の墓の傍らで、静かに眠っている。

### おわりに

辛亥革命期の女性運動家たちは、親や兄弟が学者であったり、政治家であったりするなど、育った環境の影響を大きく受けていることが多い。湯国梨の友人、張黙君も、父の張通典が孫文の秘書長を務めた高官だった。ところが湯国梨は、特にこれといった縁故を持ち合わせていない。浙江の田舎町で育ち、詩を書くことに慰めを見出していた少女は、伯父のわずかな援助と自分の才能だけを頼りに、上海の務本女塾に進んだ。そこで学問を授かり、仲間と出会ったことで、大きく自分の世界を広げた。革命運動、女権運動へと足を踏み入れるきっかけも、この女学校でつかんだ。その後は女学校仲間の人脈を頼りに、数々の運動に加わり、同時に教員として後身の育成に励んだ。湯国梨の波乱に満ちた人生は、この務本女塾から始まったと言ってよい。ここからは、女学校が一人の女性に社会で活躍する道を開いた、典型的な一例を見て取ることができる。五四新文化運動期には、わずかだが女子の就学率も上がり、自分の意志によって進学し、運動に加わる女性も増えてくる。湯国梨は、まさにその先駆けであったと言える。

湯国梨は決してラディカルな思想の持ち主ではない。また夫となった章炳麟の存在があまりにも大きすぎたため、結婚後の彼女の生活は、大半が章炳麟を支えることに費やされた。賢夫人という評価が定着したゆえんである。だがその中でも、湯国梨は女性教員、女性運動家としての活動を止めることはなかった。主婦となって家庭に戻る卒業生も少なくなかった中、彼女が敢えてこうした活動を続けたのは、早期の学校教育

を受けた知識人女性として、最大限、社会へ貢献せねばならないという自負が強かったからではないだろうか。

また湯国梨の初期の活動を通して見えてくるのは、女学校という場が、単に女性に学問を授けるだけでなく、新しい思想に向かって行動する学生たちのサークルを作り出し、結果的に革命運動、女権運動の根拠地として機能していたことである。言い換えれば女学校が、知識人女性に、活動の場を提供していたと言ってもいい。卒業後、彼女たちの多くは教育にたずさわり、今度は自分たちが後身を育てる側に回った。湯国梨もまた、郷里の呉興女学校、上海の小学校及び神州女学で教鞭を執り、結婚後は博文女学校の運営を助け、後には蘇州の章氏国学講習会で教壇に立った。とかく派手な女権運動が脚光を浴びがちであるが、近代における女性の社会貢献としてまず挙げられるのは、教育者としての働きである。さらにいうと、女権運動に関わった女性運動家たちも、その多くが学校教員としての顔を持っていた。彼女たちの生活の基盤が教育活動にあったことは、もっと注目されてしかるべきであろう。もしかすると彼女たちにとって、教育活動と政治運動は表裏一体のものであったのかもしれない。知識人女性の中で、教育活動と女権運動がどういう位置付けにあったのかについては、今後さらに考察を深めていきたい。

### 注

- ① 正確には湯國梨。湯國黎と記すものもある。
- ② 龍溪書舎、一九七四年出版
- ③ 『章炳麟・章士釗・魯迅―辛亥の死と生と』二六六頁。湯国梨の詩および詞は、一九四〇年代に『影観詩稿』『影観詞稿』として出版された。その後、長らく稀本とされていたが、二〇〇〇年に南京師範大学『文教資料』に再録された。
- ④ 章念馳氏は湯国梨の長男、章導の次男。湯国梨は章炳麟との間に、二

人の息子(章導と章奇)を授かった。章奇は国共内戦中にアメリカに渡ったが、章導は人民共和国に残り、三人の息子と二人の娘をもうけた。章念馳氏は上海社会科学学院の研究員を経て、現在は、上海東亜研究所の所長、上海市台湾研究所の副所長を務めている。

⑤ 『文史資料選輯』第七輯(総一〇七) 中国文史出版社、一九八七年一月。以下、湯国梨の生い立ちについて、特に断りが無い箇所は、この「伝略」からの引用とする。

⑥ 湯国梨が生前に語った回想録が、湯国梨(口述) 胡覚民(整理)「太炎先生軼事簡述」として、許寿裳『章太炎伝』百花文藝出版社、二〇〇四年に収録されている(初出は『蘇州文史資料選輯』第七輯、一九八一年一〇月)。この一部がさらに整理され、胡覚民編『湯国梨談章太炎』として、『辛亥革命七十周年—文史資料紀念專輯』上海人民出版社、一九八一年に発表された。また湯国梨の長男、章導による父母の回想録もある。章導「憶辛亥革命前後先父章太炎若干事」『辛亥革命七十周年—文史資料紀念專輯』、章導「記先父母章太炎及湯国梨在抗日戰爭中二三事」『章太炎生平与思想研究文選』浙江人民出版社、一九八六年所収(初出は『蘇州文史資料選輯』第一四輯、一九八五年)。

⑦ 中華人民共和国では、上述の諸史料をもとに書いたと思われる、湯国梨の小伝がいくつか発表されている。湯大民「湯国梨先生小伝」『文教資料』二〇〇〇年四月、陳礼栄「民国才女湯国梨」『文史精華』二〇〇三年九月は、湯国梨を女性解放運動の先駆者、二〇世紀の進んだ女性の典型であるとして高く評価している。以下は章炳麟との関わりを描いたものである。江東躍、沈建中「同眠于西湖南屏山麓的伴侣—記章太炎和夫人湯国黎」『浙江档案』一九九九年六月、余麗芬「章太炎的家世与婚姻」『浙江档案』一九九六年六月、沈建中「章太炎与夫人湯国黎」『文史精華』一九九九年五月。

⑧ 「湯国梨談章太炎」五一頁

⑨ 「伝略」によると、一九〇五年に入学し、一九〇七年に卒業したことになる。「太炎先生軼事簡述」一六四頁では、一九〇二年に入学し、一九〇四年に卒業したと書かれている。しかし後述するように、湯国梨は在学中に上海で保路運動に参加した経験がある。一九〇七年末の新聞

記事に、保路運動の女性指導者として、湯国梨の名が見られることから、翌一九〇八年に卒業した可能性が高い。また「太炎先生軼事簡述」には、張黙君が師範科の二期生、湯国梨が師範科の三期生であったという記述がある。一九〇七年の卒業式の記事(李又寧、張玉法主編『近代中國女權運動史料』伝記文学社、一九七五年、一六二頁、初出は『女子世界』二年六期、一九〇七年)に、張黙君の名が見えることから、一年後輩の湯国梨は、その翌年に卒業したと考えるのが妥当と思われる。師範科は二年であったため、さかのぼって一九〇六年の入学とした。

⑩ 一九〇二年に務本女塾と名付けられたこの学校は、一九一二年、一時閉校となったが、上海県立第一女子中学及び高等小学校として復活。一九一六年には上海県立務本女子中学となる。一九二八年、上海市立となる。日中戦争時には一時閉校となるが、一九四五年に再び開校する。一九五二年、上海市第二女子中学と校名を改める。一九六七年、上海市第二中学の校名で、男女共学校として歩み始め、現在に到っている。務本女塾についての専著は管見の限りではまだない。史料としては、『中国近代学制史料』第二輯下冊、華東師範大学出版社、一九八九年、五八九(六〇九頁)に、さまざまな雑誌に載せられた務本女塾の資料や回想録が収められている。同書に収められた吳若安の口述記録「回憶上海務本女塾」からは、当時の教学の具体的な様子をうかがい知ることができる。また同校の卒業生でもある俞慶棠(一八九七—一九四九)が「三十五年来中国之女子教育」(『中國婦女史論文集』第一輯、一九八一年所収。初出は一九三二年)の中で言及しているほか、上海通社『上海研究資料續集』(『民国叢書』第四編八一、一九九二年所収。初出は中華書局有限公司、一九三九年)にも、学校の沿革が記されている。時代は下るが、同校を卒業した女性の口述記録が、近年にも発表されている。徐修梅「務本女中…温、誠、勤、朴」李小江主編『讓女人自己說話—独立的歷程—』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇三年。

⑪ 懐疚は字で名は馨。吳懐久、吳懐九と記されることもある。

⑫ 「回憶上海務本女塾」六〇六頁

⑬ 汪向荣著、竹内実監訳『清国お雇い日本人』朝日出版社、一九九一年、二〇九—二一〇頁

- ⑭ 「回憶上海務本女塾」六〇三〜六〇四頁
- ⑮ 『中国近代学制史料』第二輯下冊、五九七頁
- ⑯ 一八九〇—一九九〇。上海南洋女子師範学校、同濟大学で教員を務め、上海南洋女子中学校の校長となる。人民共和国成立後には、上海市教育局の副局長の職に就く。
- ⑰ 一八八四—一九三八。北京女子師範大学の校長となり、国立大学初の女性校長となった。楊蔭楡の生涯については、櫻庭ゆみ子「女校長の夢—中国女性解放運動先駆者としての北京女子師範大学校長楊蔭楡—」『魯迅と同時代人』汲古書院、一九九二年に詳しい。櫻庭氏は務本女塾の教学方針にも言及している。
- ⑱ 一八八四—一九六五。名は昭漢だが、字の黙君の方が知られているため、本稿では張黙君と表記する。一九〇五年、中国同盟会に加わる。江蘇で『大漢報』を出版。武昌蜂起の知らせを聞き、女子北伐隊を組織しようと呼びかけた。一九一八年、アメリカのコロンビア大学に留学。帰国後は、江蘇省立第一女子師範学校の校長を務め、平民教育運動にも関わる。人民共和国が成立する以前に台湾へ移り住み、その後も国民党の中央評議委員などを務めた。
- ⑲ 楊絳「回憶我的姑母」『楊絳散文選集』百花文藝出版社、一九九五年、一三二頁。初出は『回憶兩篇』湖南人民出版社、一九八六年所収。
- ⑳ 「回憶上海務本女塾」六〇七頁
- ㉑ 「太炎先生軼事簡述」一六七頁
- ㉒ 近代における女子の体育教育は、民族を強化するという目的から始められた。游鑑明「近代中國女子體育觀初探」『中國婦女史論集』第五集、二〇〇一年七月に詳しい。
- ㉓ 富香海「創立時期的奉天女子師範学堂」『文史資料選輯』第五輯、遼寧人民出版社、一九八四年（第一版は一九六五年）一三〇〜一三二頁
- ㉔ 「回憶上海務本女塾」六〇七〜六〇八頁
- ㉕ 一九〇六年に蘇本岳らによって創設された民立女子中学堂のことを指すと思われる。
- ⑳ 「上海女学踊躍認股」『中国婦女運動歴史資料（一八四〇—一九一八）』中国婦女出版社、一九九一年、三八五頁。初出は『神州日報』一九〇七年一月一日。
- ㉗ 「浙江旅滬女同鄉懇親会紀事」同右、三九〇頁。初出は『神州日報』一九〇七年二月二一日。
- ㉘ 一八九〇年、寧波出身の張氏が開いた中国式庭園。入場料を取って一般に開放され、行楽客でにぎわう。一九一六年廃園。
- ㉙ 一八八八年、無錫の企業家、周廷弼が同郷人のために上海に建てた同郷会館。当時、無錫は無錫、金匱の二つの県に分かれており、二字を取って錫金公所と呼ばれた。同郷人に宿舎を提供しただけでなく、福祉施設のような役割も果たした。
- ⑳ 程頴、蘇本岳など、浙江旅滬同郷会の主要メンバーが、後の革命支援団体に加わっている。なお、程頴は務本女塾の運営に関わっていたこともある。呉馨「務本女学史略」『中国近代学制史料』第二輯下冊、五八九頁
- ㉑ 『近代中國女権運動史料』一一六二頁
- ㉒ 「回憶上海務本女塾」六〇七頁
- ㉓ 小野和子「辛亥革命のなかの女たち」『中国女性史』平凡社、一九七八年、中山義弘「近代中国における女性解放の思想と行動」北九州中国書店、一九八三年、前山加奈子「近代中国女性と国家とのかかわり」『日本—国家と女』青弓社、二〇〇〇年など。関西中国女性史研究会『中国女性史入門』人文書院、二〇〇五年、六四〜六五頁、及び中国女性史研究会『中国女性史の二〇〇年』青木書店、二〇〇四年、三八〜三九頁に載せられた竹内理輝氏の解説も参考になる。
- ㉔ 女性の団体組織については、馬燕「二十世紀初期における中国の婦人組織」『立命館文學』五一〇号、一九八九年に詳しい。
- ㉕ 『中国婦女運動歴史資料（一八四〇—一九一八）』四八七〜四九五頁に、二団体に關する史料が集められている。
- ㉖ 一八七一一一九三七。一九〇四年に日本へ留学し、実践女学校で学ぶ。華興会に加入し、中国同盟会のもっとも早い女性会員となる。一九二二年、臨時約法に参政権を含む男女平等を明示するよう請願。臨時約法に男女平等の条文がなかったことから、連日参議院に押しかけて、派手な抗議活動を展開した。女子参政同盟会を結成したが、参政権獲得には到らな

かった。後、女学校を開設するなど、女子教育の発展のために尽力した。  
 ③⑦ 一八七二—一九一六。日本留学時に中国同盟会に加わり、革命運動に参加する。中華民国が成立すると、唐羣英らとともに、女性参政権獲得運動の指導者となった。後、故郷の湖南で女学校を創設したが、過労のために早世した。

③⑧ 「組織女子後援会」『中国婦女運動歴史資料（一八四〇—一九一八）』四八七頁。初出は『時報』一九一一年一月二三日。

③⑨ 一八九一—一九七八。女性運動家。中国国民党に加入。数々の女権運動に加わり、『中国婦女運動通史』『婦運四十年』などを記す。人民共和国成立後は、台湾へ移住し、国民党監察院秘書などを務めた。

④⑩ 「民立報」一九二一年一月三日、五頁に載せられた「女界協賛會姓名録」にも、湯国梨の名は見当たらない。なお、務本女塾の創始者である呉懷疚夫人、俞慶棠、辺境宏など、務本女塾の関係者、卒業生が多く名を連ねている。

④⑪ 「民立報」一九二一年二月三日、一頁

④⑫ 馬燕氏の指摘では、二つの団体の関係は極めて密で、両方の団体に名を連ねている女性も少なくなかった。それぞれ別の団体名を掲げてはいるが、活動内容は重なっていた可能性が高い。

④⑬ 「湯国梨談章太炎」五〇—五一頁

④⑭ 張園の別名。西洋人の別荘を買い取った清末の新式庭園。一八八五年、一般に開放。洋式邸宅に舞台、テニスコート、茶室などを備えていた。辛亥革命前夜には、政治集会も開かれた。一九一五年頃廃園となる。

④⑮ ただ創立の目的は異なるものの、創始者の呉懷疚とその夫人が革命に協力的だったことは知られている。馮自由『革命逸史』第五集（商務印書館、一九四七年）臺灣商務印書館、一九六九年、二七七—二八六頁及び本稿注④⑩など。

④⑯ 夏曉虹氏もこう指摘している。「務本女学堂は『とりわけ家政教育を重視』し、それを『良妻賢母養成の基礎となす』としていたけれども、学生たちのなかにはやはり革命分子が少なくなく、たとえば同盟会会員の張昭漢「張黙君」や、章太炎夫人の湯国梨らがいた。穏健派の良妻賢母教育の中で培われた愛国思想もまた、革命的行動へと転化しうるのであ

る。」夏曉虹著、藤井省三監修、清水賢一郎、星野幸代訳『纏足をほどこいた女たち』朝日選書六〇三、一九九八年、一五六頁

④⑰ 一八六八—一九三四。安徽の生まれだが、結婚して移り住んだ北京で、秋瑾と義姉妹の契りを結ぶ。秋瑾の日本留学を支援し、彼女が処刑されると、その死を悼み、遺著の発行などに努めた。後、故郷に小学校を創り、教育、福祉の分野に力を注いだ。

④⑱ 一八八三—一九二三。父の支援の下、『女学報』を創刊。日本で秋瑾らと親交を結び、「共愛会」の会長となる。「楚南女子」のペンネームで数々の文章を発表した。

④⑲ 「中国婦女運動歴史資料（一八四〇—一九一八）」五八二—五八三頁。初出は『時報』一九二二年三月二三日。『中国女性の二〇〇年』四五—四八頁に、須藤瑞代氏による翻訳と解説が載せられている。

⑤⑰ その経緯は談社英『中国婦女運動通史』婦女共鳴社、一九三六年、『民国叢書』第二編一八、上海書店、一九九〇年所収、六一—六五頁に詳しい。

⑤⑱ 『神州女報』と名付けられた雑誌は、三種類出版されている。一つは一九〇七年に陳志群らによって出されたもの。神州女界協済社が編集した『神州女報』は、一九二一年一月から一〇日おきに出された旬刊期と、一九一三年四月からの月刊期に分けられる。月刊期の影印本は、『近代中国史料叢刊』第三編第三八輯、文海出版社、一九八八年に収められている。雑誌の内容については、『中国婦女運動通史』八四—九一頁に詳しい。

⑤⑲ 『神州女報』月刊第二號、一九一三年五月

⑤⑳ 白水紀子「民国時期の蓄妾制」『中国女性の二〇世紀—近代家父長制研究—』明石書店、二〇〇一年、一八四—二一八頁。

⑤⑳ 「關瑞麟棄妻重婚洋女案誌詳」『神州女報』月刊第三號、一九一三年六月、七八—八四頁、「一夫多妻者不遵人道」同右九〇—九一頁、「關陳案之結束」『神州女報』月刊第四號、一九一三年七月、六〇—六一頁

⑤⑲ 「別興興」『神州女報』月刊第一號、一九一三年四月、九九—一〇〇頁  
 ⑤⑲ 一八八八—一九〇八。江蘇省太倉の生まれ。務本女塾で湯国梨とともに学んだ。著書に『苑結録』がある。

⑤⑲ 「懷亡友俞君慶和」『神州女報』月刊第一號、一〇〇頁

⑤⑲ 「秋日散步薛家橋歸而書奇二妹」『神州女報』月刊第二號、一三〇—

- 一三二頁
- ⑤9 「作客有感」『神州女報』月刊第三號、九九頁
- ⑥0 「時事感言」同右、九八頁
- ⑥1 「上海各女校畢業誌盛」『中華婦女界』第一卷第八期、一九一五年八月、特別紀事一〇二頁
- ⑥2 「上海神州女學近況」『中華婦女界』第二卷第二期、一九一六年二月、特別記事三頁
- ⑥3 「中國女子教育底過去與將來」『婦女評論』第二期、一九二二年三月、一〇二頁
- ⑥4 「中國婦女運動通史」六五頁
- ⑥5 「民立報」一九二二年四月三日、一〇頁
- ⑥6 「吳淑卿女士投軍文」『民立報』一九二一年一月三日、六頁
- ⑥7 陶菊隱『袁世凱竊國記』（原題は『六君子傳』臺灣中華書局一九六七年、一一五〜一六頁。なお貴重な本書を拝見させて頂いた松本英紀先生に、謝意を表したい。
- ⑥8 湯国梨は湖北籍ではなく、浙江籍である。
- ⑥9 「湯国梨談章太炎」五二頁
- ⑦0 別名、愛儷園。ユダヤ人の富豪、サイラス・ハルドーンとその妻が住んだ邸宅。中国風庭園の中に多くの建造物が点在した。
- ⑦1 「民立報」一九二三年六月一六日、一一頁。なお『章炳麟・章士釗・魯迅―辛亥の死と生と』一九一頁に、『順天時報』六月二〇日に載せられた披露宴の様子（『章太炎君結婚誌盛』）についての解説がある。
- ⑦2 「憶辛亥革命前後先父章太炎若干事」六四頁
- ⑦3 「章太炎先生家書」中華書局、一九六二年。湯国梨自身が序文を記している。一九八五年に上海古籍出版社より再版が出された。
- ⑦4 長女姦、次女姦、三女姦。
- ⑦5 章姦（一八九三―一九一五）。章炳麟と王氏との間の長女。一九一一年に龔宝銓と結婚。
- ⑦6 「憶辛亥革命前後先父章太炎若干事」六四〜六五頁
- ⑦7 同右、六四頁
- ⑦8 「太炎先生軼事簡述」一六五頁
- ⑦9 一九一六年、黄紹蘭が発起人となり、上海フランス租界、貝勒路（今の黄陂南路）に開いた女学校。一九二〇年に経済的事情のため閉校となったが、翌年、場所を移して再開した。一九三三年、施設が老朽化しているという理由で閉校となった。
- ⑧0 「伝略」には教務長を務めたとあるが、湯国梨自身が語った「太炎先生軼事簡述」の中には、そのような記述はない。趙敬若という学友が、事務を担当する校長となり、後に鍾という姓の学友が、校長の任を引き継いだとある。また理事会を設け、黄興夫人である徐宗漢が理事長となった。「太炎先生軼事簡述」一五五頁
- ⑧1 一八九二―一九四七。京師女子師範学堂（後の北京女子師範大学）を卒業し、開封で教職に就く。辛亥革命が起こると、女子軍を組織した。黄侃の妻となるが、正式な婚姻手続きを取っておらず、娘をもうけた後に別れている。その後も教育活動に従事しながら、女権運動にたずさわったが、精神を病んで早世した。
- ⑧2 「記先父母章太炎及湯国梨在抗日戦争中二三事」一二七頁
- ⑧3 「太炎先生軼事簡述」一五五〜一五八頁
- ⑧4 「博文女学校増設中学科簡章」『中華婦女界』第二卷第四期、一九一六年四月、特別紀事二頁
- ⑧5 「伝略」にはこうあるが、『中國婦女運動通史』一二五頁に記された会の主だったメンバーの中に、湯国梨の名は見当たらない。
- ⑧6 この年の春、章炳麟は江蘇省教育会に招かれて国学の講義をした。姚奠中、董国炎著『章太炎学術年譜』山西古籍出版社、一九九六年、三二二頁。その縁で妻の活動にも顔を出してみたという程度かも知れない。
- ⑧7 「記先父母章太炎及湯国梨在抗日戦争中二三事」一二七〜一二九頁
- ⑧8 「章太炎学術年譜」五〇二〜五〇三頁に載せられた国学講習会予備班の時間割によると、湯志瑩（湯国梨の字）は、「文課」と「專題」を担当している。
- ⑧9 ただ、育った環境がまったく革命と関係なかったわけではない。張通典とともに同郷（烏鎮）の名士、沈善保（字は和甫）が結婚の媒酌人を務めており、湯国梨が女学校に上る以前から、彼女の面倒を見ていたよ

うだ。沈善保は烏青鎮中西学堂を創設して、新しい思想を広めるなど、当時としては極めて開明的な人物だった。『烏青鎮志』一九三六年、『中

國地方志集成郷鎮志專輯②③』上海書店、一九九二年所収、六二五～六二六頁。

(本学非常勤講師)